

SSKO

社会福祉法人 はらからの家福祉会

われら同胞

No.36



☆☆☆ 目次 ☆☆☆

- 2 P 巻頭言
- 3 P さあ 今年も！・実習生感想リレー
- 4 P～5 P タイソクを止めるな！
- 6 P プラッツ旅行
- 7 P 作業所製品紹介
- 8 P 賛助会コーナー

新年を迎えて

はらからの家福祉会 理事長 須長 靖夫

新年、明けましておめでと
うございます

法の改正を受け「サービス利用
計画」の義務づけによる相談支

援の発展に備えるなど、地域生
活支援事業におけるさまざまな

施策拡充に向けての転換が期待
される年になりたいと思ってい

ます。私たちは、地域で精神障
害とご支援を頂きながら進め

て参りました。移行後9ヶ月
が経過致しましたが、お陰様

で利用者の皆様の日常生活・
社会生活支援などを柱とする

多機能型の事業形態による新
事業も軌道に乗ってきており

ます。これも一重に皆様方の
お陰と職員共々、心より感謝

申し上げます。移行後9ヶ月
が経過致しましたが、お陰様

で利用者の皆様の日常生活・
社会生活支援などを柱とする

多機能型の事業形態による新
事業も軌道に乗ってきており

ます。これも一重に皆様方の
お陰と職員共々、心より感謝

申し上げます。移行後9ヶ月
が経過致しましたが、お陰様

で利用者の皆様の日常生活・
社会生活支援などを柱とする

多機能型の事業形態による新
事業も軌道に乗ってきており

ます。これも一重に皆様方の
お陰と職員共々、心より感謝

申し上げます。移行後9ヶ月
が経過致しましたが、お陰様

今年度は、障害者自立支援

法改正を受け「サービス利用
計画」の義務づけによる相談支

援の発展に備えるなど、地域生
活支援センタープラッツ」で相

談支援事業を始めて以来ずつ
と抱えている、【活動現場の狭

隘問題】が未だに解決されてい
ないという事です。この問題を

どのようにして解決していく
か、私たち自身努力しなければ

なりません。国分寺市も事業
を委託している立場から共に

考えて欲しいと思います。

昨年11月には衆議院が解散
され、3年4ヶ月ぶりに総選

挙が行われました。結果はご承
知の通りでございます。ここ数

年私たちは関連法規のめまぐ
るしい変遷に振り回されてき

ましたが、今後4年間、新政権
は私たち障害保健福祉分野の

未来に向けて、希望が持てる

しっかりと舵取りをして頂
きたいと切望する次第でござ

います。

今年へび年、実は蛇は金
運はもちろん、財運、子宝成

就、安産の効果もあると言わ
れています。また受けた恩を

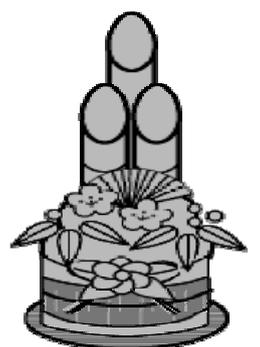
忘れないとも言われています。
神社などで蛇を祀ってい

る所も多くありますが、特に
白い蛇をみかけたらそれは幸

運が訪れる前触れかもしれま
せん。

今年が皆様に取りまして良
い年になりますよう祈念致し

まして、新年のご挨拶とさせ
て頂きます。



この今年も!

はらからの家福祉会副理事長 藤田 英親

新年明けましておめでとうございます。

「年齢を重ねるたびに一年一年が短く感じる」とよく言われますが、昨年は特に短かったような気がしています。福祉発のデイケア併設精神科クリニックを作るといふ、はらからのプロジェクトから生まれた国分寺すずかけ心療クリニックは開業2年半を過ぎました。障害者自立支援法への制度移行の苦労の中で、いわば服に身を合わせて消耗して行くだけでなく、必要とされる資源を創造して行くという思いの中でスタートしたプロジェクトでした。



「病院から地域へ」と言われ始めて何年経ったでしょうか、「地域の受け皿が…」という言葉も何度聞いた事か。国分寺の地で精神障害福祉の中核を担っているはらからが、解決できる問題、作り出せる社会資源、提供できるサービスはまだまだ多いと感じています。

個性あふれるはらから職員たちと、さて今年一年でまだどこまで行けるか。わくわくしながら腕まくりして新年をスタートしたいと思います。

実習生感想リレー

「住民票はとらない。退院した友人が亡くなった。だから、退院はしない。」ソーシャルワーカーと長期入院を余儀なくされた患者さんとのやりとり。病院実習で見た光景でした。昔、退院をあきらめ、何十年と長い年月をかけて病院の生活に慣れた、自分を慣れさせた患者さんだったかもしれません。そんな方にどうやってアプローチしていくのだろう。退院を促すのは酷な話なのではないか。そんなことを思っていた時、ふと、はらからの家に実習でお世話になった時のことを思い出していました。退院し、生活をもう一度作り直そうとしている方、ときにはつまずきながらもその人らしい生活をしている方、作業所で汗を流し清掃する方、実習生の私に気さくに声をかけてくださった方、そんな光景を思い出していた。以前の私なら長期入院している方に、退院しなくてもいいと胸を張って言えた。無理する必要はないと。しかし、はらからの家の実習で地域で生活することの重要さに気づくことができた。だから、私は迷った。いや、はらからの家に実習に行ったことによって迷うことができた。そんな「迷い」を与えてくださったことに感謝したい。

最後に、忙しい中、実習計画を立てていただいた、藤井さん、玉木さんをはじめ、スタッフさん、利用者さんに感謝を述べたいと思います。

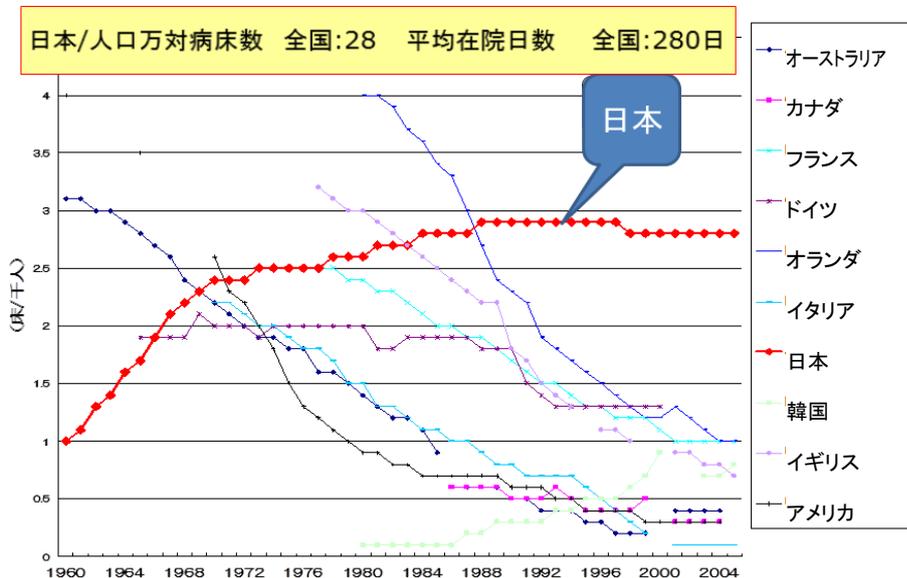
立教大学 今井 悠渡

タイソクを止めるな!

はらからの家福社会

総合施設長 伊澤 雄一

【図I 主要国の精神科ベッド数の年代推移】



わが国には72,000名の社会的入院(状態は安定しているが退院の条件が整わず長期に在院している)者が存在しており、その人たちの地域生活を取り戻すとともに、国際的にみても過剰な病床の存在(約35万床)を少しでも縮小(病

床削減)し、諸外国と同様に適正な入院医療体制にしていくことも眼目に、いわゆるタイソク(退院支援事業)が平成18年度より全国各地で取り生まれ、この6年で全国約2,000名の方々の退院が実現しました(東京では約300名)。当法人も18年10月から取り組みを始め、今日まで26名の方の退院をお手伝いしてきました。法人ではこの活動を地域生活支援センターを拠点的推進事業所として位置付け、さらにグループホームピア国分寺の一室を主に退院のための「体験宿泊」の専用部屋として機能させ多くの人たちの利用に供してきました。

そして退院への準備を進めるといふこの営みの最大の難題は、実は長期入院している人たちをその気にさせる関わりです。多くの人たちが「退院したくない」「このまま一生病院で暮らして行く」とおっしゃる

のです…。

そこで登場するのが、ライフパートナー(LP)と呼ばれる当事者のスタッフです。自ら入院経験をもち、いろいろ苦労もあつたけど(あるけど)今は街でどっこい暮らしているという人たちが、街での暮らしのリアル(喜怒哀楽)を投げかけるのです。「あなたの退院を街で待っていますよ」というメッセージと共に…。

現在7名のLPは、精神科病院に職員と共に足を運び、病院の作業療法室や病棟でのプログラムに参加しながら、入院患者さんと直に接しながら関係作りを進めつつ、自身の生活になぞらえた暮らし情報の伝達や、社会資源、制度の活用法等々を伝えます。





LP活動報告会

LPの伝達する情報や言葉の力は、われわれ関係者の数多の情報よりも波及力や浸透力の面で強く、発信力が断然違います。退院へのためらいを抱いていた人も、徐々に「やってみようか・・・」と前向きな気持ちとなり、具体的な条件づくりに取り組み始めるといった流れを作り出してきました。また逆に退院に

焦りを持っている人(こういう人との出会いも多くあります)、には退院に向けた準備の具体的中身と、退院後を想定した生活プランの立ち上げの要(その中には退院後の支援者を確保すること、仲間との出会いの大切さも織り込まれている)を自らの体験を織り交ぜながら発信します。

このような取り組みが、年を追うごとに徐々に効果をあげてきているのは事実で、それへの正当な評価を希求しておりました。ところが昨年の6月には厚労省の「行政事業レビュー(いわゆる事業仕分け)」により、思ったより成果が上がっていないという判定が下り、次年度の国予算では縮減の方向が打ち出されてしまいました。6年で2,000名の退院では実績規模が小さすぎるとい

が主要な理由でした。

しかし、1950年代からの精神科病院の増設とともに始まり、60年を超える長き歴史的経緯の中で作り上げられてきた現在の精神科入院医療体制が、それに風穴を開け、脱病院の流れを追求する本活動を、たった6年で評価するというのはあまりにも性急ではないかと思えます。同時に、実際何人が退院したかという評価軸で本活動を全て捉えるのは、事業そのものの矮小化に繋がりがかねないとも思うのです。なぜならば本活動は、医療機関の治療活動(モデル)と地域の福祉的生活支援活動(モデル)の合流点を見出す一大コラボともい

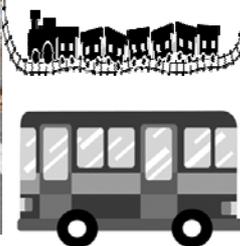
うべき実践でもあり、医療と福祉の新しい融合モデルを創造する機会となるものです。実際私たちは、今日まで多大な距離を感じていた入院医療関係スタッフと多くの機会を共有し、相互理解に基づく連携を深め、実質的な協働の場面を増しながらきています。費用対効果の財政効率だけでなく、どうかこういう評価の視点も是非入れて欲しいと痛切に感じます。

いずれにせよ作り上げられてきた実践の形や支援の文化が損なわれることなく、引き続き継続され、さらに積み上がり、状況の変化そして改革へと展開する、そのような施策推進が是非とも必要だと思っております。



フラッツ旅行

河口湖・富士急ツアー



11月14・15日に河口湖・富士急方面 一泊二日の旅行に行ってきました。

一日目に乗った遊覧船では、富士山の景色と共に秋の深まりを感じるたくさんさんの紅葉を見ることが出来てとても素敵でした。



M嬢は力もちなんです！

ホテルは河口湖の目の前にある場所でお風呂も富士山を一望できました。

夜は部屋に集まり全員でビンゴゲームをしましたが：面白いのがリーチ！と言ってからビンゴになかなかならないことでした。

二日目には富士急ハイランドに行き、園内をのんびり回りながら楽しみました。2日間天気に恵まれた旅行となりよかったです。

河口湖駅
富士急行河口湖線終点
駅番号 FJ18
昭和25年8月24日
開業
標高 857m



はいポーズ、皆さん笑顔が素敵！



お腹一杯になりましたか？



陶芸

▲ 小皿100円～

▲ 石けん置き。
魚の形がかわいい!

▲ マグカップ&ソーサー

▲ 角皿400円～

▲ 平皿 3サイズあります。
400～600円

▲ いろいろな形の箸置き
100円～



革細工

▲ しおり
150～200円

▲ 季節限定
クリスマスオーナメント

▲ コースター 250～300円

手作り陶芸・皮細工・ビーズ
さつき共同作業所

住所 国分寺市東元町3-4-19本多ビル1F

電話/FAX 042-326-3775

バザー、おたカフェ、作業所内などで販売
しています。是非、手にとってみてください。



ビーズ

▲ ビーズの指輪

▲ ストラップ

はらからの家福社会賛助会コ一十一

はらからの家福社会賛助会は、社会福祉法人はらからの家福社会の運営の維持・発展のために支援・協力することを目的として、主に財政的支援・協力の活動を行っています。

当会の趣旨にご賛同いただける方の入会をお待ちしております。会費は年間1口2千円からで何口でも可能です。会員の皆様には「われら同胞(本誌)」を送付しているほか、年に一度懇談会を開催し、会計報告・活動報告を行っています。皆様の会費は毎年取りまとめてはらからの家福社会に寄付させていただきます。

入会を希望される方は、下記口座に会費をお振込ください(同封の振込用紙も使えます。)

郵便振替口座番号

00180-8-130179

加入者名：はらからの家福社会賛助会

会費を納入いただいた方の名前を本誌に掲載させていただきます。匿名希望の方はその旨通信欄にお書きください。



<平成24年度8月から10月の間に賛助会費をご納入頂いた皆様(順不同 敬称略)>

青木 優子 石川 治江 上野 容子 上柳 喜一 熊谷 寿子 小坂 弘一 小林 和代 小松 友恵
小宮 敬子 小宮 弘隆 近藤 節朗 鈴木 汎子 竹内 幸子 森田 忠男 山岸 琴美 山崎 静子
山崎 昌子 伊藤 義明 藤田 英親 山田 正則 坂田 晴弘 片山 ヤエ 窪田 恭 藤沢 歩
伊澤 美枝子 野々瀬 悟子 上田 恵美子 江口 八重子 尾崎 美佐子 河崎 弘太郎
興洋エステート 浜野クリニック 有)肉のクボタ レタスの会 匿名1名

はらからの家福社会ホームページ

<http://harakaranoie.com/>



あけましておめでとうございます。

本年もどうぞよろしく

お願い申し上げます。

われら同胞編集委員一同

【編集人】

社会福祉法人はらからの家福社会

〒185-0021

東京都国分寺市南町3-4-4

TEL 042-323-5637

FAX 042-328-3240

E-Mail harakara@jcom.home.ne.jp

【発行人】

障害者団体定期刊行物協会

〒157-0073

東京都世田谷区砧6-26-21

【定価】¥120

